

# ペルー・アンデス・ケチュア語の世界

— 『グレゴリオ・コンドリ・ママーニ自伝』 —

青 木 芳 夫\*

Perú, Andes y el mundo de quechua: *Gregorio Condori Mamani: Autobiografía*

Yoshio AOKI

## 要 旨

筆者は、現在、『グレゴリオ・コンドリ・ママーニ自伝』を日本語に翻訳しているところである。グレゴリオは、20世紀前半の、まだ半封建的な風習が残るペルー・アンデスの農村で孤児として育ち、やがてクスコ市内に移住するが、晩年の1960・70年代には一介の荷担ぎ人夫として暮らした。自らの辛酸の数々を伝えるために、その生涯を若き人類学者のバルデラマらに語る決心をした。この『自伝』は単なるオーラル・ヒストリーではなく、自らの経験をも伝承風に語る、稀代の語り部、グレゴリオを得たことにより、口頭伝承の宝庫ともなっている。本稿では、その伝承を「アンデスの自然」「アンデスの神々」「牛泥棒」「スペイン人・キリスト教・文明」に分類し、紹介する。

## I はじめに『グレゴリオ・コンドリ・ママーニ自伝』

『自伝<sup>1)</sup>』の編者解題によれば、主人公のグレゴリオ・コンドリ・ママーニは、1908年7月6日に、クスコ県アコマーヨ郡アコピア村に生まれた。早くして両親を失い、代母の元で育てられ、10数歳で独り立ちし、農村を転々とした後、1933年8月に3年間の兵役についた。その後、クスコ市内に移住し、1943年10月にはワスカル綿織物工場に清掃係として就職する。この頃が彼にとってまだもっとも経済的に安定したときだったように思えるが、工場が閉鎖される1967年3月に失職することになる。その後は、わずかな年金を受け取りながら、不完全就業の状態となり、やがてフルタイムの荷担ぎ人夫となり、三番目の妻アスタ（仮名）〔クスコ市近郊のサンヘロニモで非定住小作農の家で育ち、早くに父と兄を亡くしたためにクスコ市に働きに出た〕も、家計の足しに食べ物売りを始めるようになる。

この頃、1968年に、若き人類学学徒だったリカルド・バルデラマ・フェルナンデスが、グレゴリオとアスタが先住する、クスコ市郊外の新開地コリパタに転居してきて、知り合うこととなる。やがてバルデラマは、1973年に荷担ぎ人夫についてのドキュメンタリー映画（ルイス・フィゲロア監督）の制作に協力したとき、隣人グレゴリオの語り部としての天賦の才能に接した。

平成15年9月26日受理 \*文学部史学科

1975年には『自伝』作成を目的として、グレゴリオ、そしてアスンタがケチュア語で語るままに録音し、スペイン語に翻訳し、編集するという共同作業を開始し、1977年には、『自伝』初版が刊行されることとなる。



図1 「自伝」第2版

もちろん、グレゴリオもアスンタもケチュア語のモノリンガルであり、スペイン語の読み書きはほとんどできなかった。政府が農村教育の普及に不熱心だった20世紀前半には、周辺農村からクスコ市に移住してきた先住民系農民のばあい、それが普通だった<sup>2)</sup>。グレゴリオは、3年間兵

役についているときにスペイン語の読み書きを習わされたが、無駄だった、と自分自身で述べている。アスンタも、いくつかのアルファベットが読める程度だった。スペイン語ができないために味わった苦勞は多かったことだろう。そのような二人の自伝が出版されるにいたったのには、彼らのケチュア語の語りに耳傾ける、若き人類学学徒で、ケチュア語とスペイン語のバイリンガルだったリカルド・バルデラマ・フェルナンデス〔ケチュア語が母語だった、と自ら述べている〕やカルメン・エスカランテ・グティエレスとの出会いがきっかけとなったが、ある意味では出版されるべくして出版された、ともいえよう<sup>3)</sup>。

英語版<sup>4)</sup> 翻訳者の「あとがき」によれば、その2年後の1979年に、グレゴリオは自動車事故に遭い、クスコ市内のロレーナ病院で息を引き取った。享年71歳だった。4日後に、アスンタが病院のモルグで彼の死体と対面した。バルデラマらは、グレゴリオのためにミサを上げた。グレゴリオは、現在、先住民系信者とともに歩んだ故マンヤ神父で有名なアルムデナ教会の墓地に永眠している。

ところで、ペルー・アンデスの口頭伝承についての文献類は、これまで、語り部が無名であったり不特定多数であったりするのが普通であり、また記録者が語り部の帰属集団とは民族的・階級的に異なることも多かった。これに対して、この『自伝』は、グレゴリオという一人の人間によって語られたことにより、またバルデラマらの筆を通してはいるものの、単なるインフォーマントとしてではなく「自伝」として記録されたことにより、グレゴリオが口頭伝承をどのように解釈したのか、さらには自らの体験を口頭伝承風にもどのように理解し、納得しようとしたのか(あるいは納得しなかったのか)、という微妙なニュアンスまで、われわれ読者に提供してくれる。それゆえ、貴重な歴史資料ともなっているのである。

以下では、その伝承を「アンデスの自然」「アンデスの神々」「牛泥棒」「スペイン人・キリスト教・文明」に分類し、簡略な解説を加えることにより、紹介しよう。

## II アンデスの自然

ペルー・アンデスの自然は、周知のように、多様で過酷である。アンデス山脈を基軸とした海岸部・山岳部・密林部という3区分に高度差を加味することにより、地理学者ブルガル＝ビダルは、八つの地域に区分した。アンデス山脈西斜面は、ユンガ(果樹など)・ケチュア(トウモロコシ栽培)・スニ(イモ栽培)・プーナ(牧畜)・ハンカ(山頂)の五つに細区分される。海岸部・山岳部・密林部の相互間、さらに高度差によって細区分された、異なる生態学的階梯の相互間は、ムーラが命名した垂直統御というシステムによって緊密に結合されていた。

また、同じアンデス山脈に位置するとはいえ、別名アルティプレーノと呼ばれるペルーのプーナ地方からポリビアにかけての山岳部は、確かに海拔は4000メートル近いが、どちらかといえば平坦な高原地帯を形成している。もっとも急峻な山容を呈するのは、海拔では2000メートル後半から3000メートル前半のクスコ地方のあたりである。資料1が示しているように、クスコ市は「山籠れる」都市なのである。クスコ市から列車で旅する旅行者は、プーナ市に向かうにつれて、農耕地帯から牧畜地帯へと変化する車窓の風景に魅入ることだろう。

もちろん、普通なら農耕限界のはずの海拔3000メートルを超えるにもかかわらず、赤道に近い「熱帯高地<sup>5)</sup>」であることから、農耕が可能となるわけではあるが、資料3のように、過酷な自然条件の中で農耕や牧畜を営まざるを得ないことに変わりはない。自然の過酷さを前にすれば、人々は何と無力なことか。グレゴリオが伝えるアラリワという共同畑の作物番は、氷雪からジャガイモ畑を守るために、聖シプリアンの祈りを唱え、香や乾燥タマネギを焚き、灯油や聖水を振りかける。それでもだめなら、素っ裸になって、灯油や聖水を振りかけた土くれを投げつけるしかなかった、という。だから、資料2の話が示唆するように、数種の作物に特化するのではなく、一つの作物がだめになっても、食いつなげるように、多様な、何百種類ものイモやトウモロコシの品種が大切に伝承されてきた。

また、資料4が示すように、ケチュア語でチクチと呼ばれる氷雪によって台無しにされた作物は無に帰するのではなく、盗まれて、他の場所に保管されたただけだ、というのは興味深い発想である。

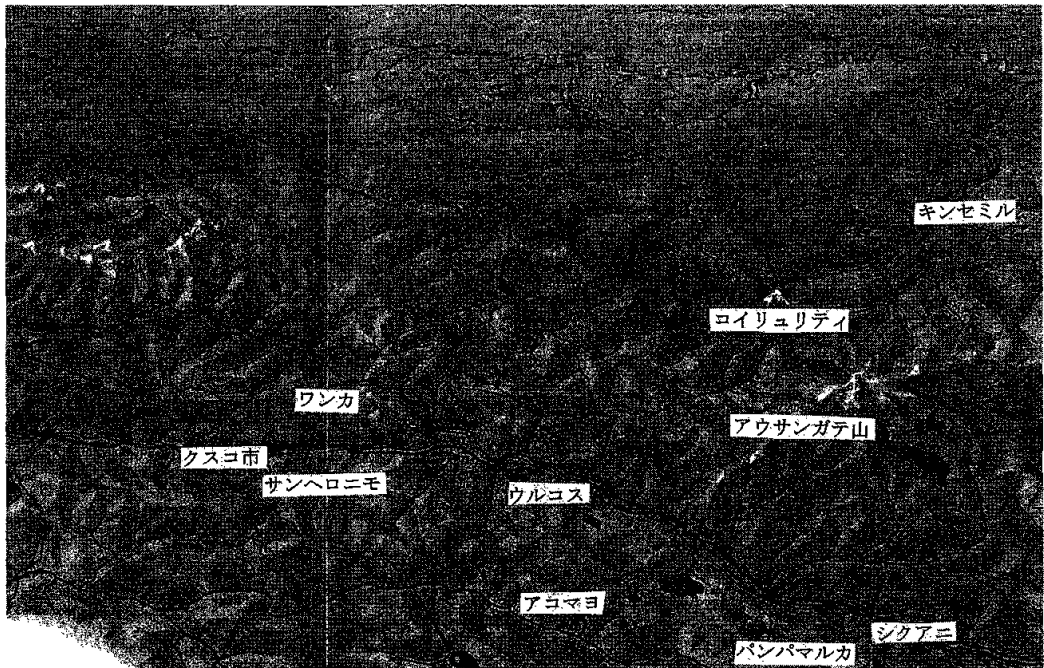


図2 クスコ地方

(出典) *Guía turística del Cusco y región*, Lima, 1998, pp.16-17.

### 【資料1】クスコの建設

昔、クスコは何もない原っぱだった。山もなかった。風が吹きすさび、せつかくインカが作った壁も家もなぎ倒された。インカは、ラ・ラヤ<sup>6)</sup>へ行って大きな囲いを作り、クスコ建設が完了するまで、風を閉じ込めておこうとした。そこへ、風の持ち主であるインカ・コヤ（正妃）がやってきて、一日だけの猶予をインカに与えた。インカは太陽をつなぎとめ、一日を長くした。建設が完了すると、インカは、自分の妻の忠告に従い、風除けのためにクスコの周りに山々を築い

たのである。

### 【資料2】大地の神様パチャママ

いつのことか知らないが、神様が、種類の植物から、つまり一本の根から、人間が食べる実がみんな稔るように、お命じになった。たとえば、てっぺんに小麦が成り、両側にはトウモロコシの果穂が5～10本でき、根にはジャガイモができるように。パチャママが怒って抗議した。「そんなにいろんな作物は生めません。作物には別々の植物と根がよいのです。」それ以来、小麦とトウモロコシとジャガイモは、別々の根を持つようになった。

### 【資料3】チクチという氷雪

チクチの中を、三人の兄弟がいつも一緒に進む。先頭のベルナクは一番騒々しくて、上に行ったり、下に行ったり、爆発したりする。それは雷で、脅かすだけだ。二番目はエラクで、おとなしい。聖シプリアンのお祈りで侮辱し、灯油と聖水を振りかけると、退散するという。トウガラシのように彼の目を焼いてしまうからだ。最後のチャナク<sup>7)</sup>は一番凶暴だ。何を恐れず、畑に入ると、ジャガイモもソラマメも、すべてを盗んでしまう。作物の魂を持っていってしまうのだ。魂を抜かれたら、収穫は期待できない。

### 【資料4】湖の神様ママコーチャ

ピンチムロ村出身の旅人が、高地の草深い道を歩いていた。激しい雨が降り始め、闇夜になった。遠くに小さい明かりが見え、近づいた。家畜番の小屋ではなく、荒れ果てた倉庫のようだった。中から、小柄で白髪の老女が出てきて、息子たちが凶暴で、あなたを殺しかねないから、お泊めできない、と言った。男が嘆願するので、老女は片隅に水甕でかくまうことにした。やがて雷鳴がし、子供たちが次々に帰ってきた。最後のチャナクは、番人から灯油をかけられたけど、奪ってやったぞ、と叫んだ。男は、甕の穴から、何頭ものラバからジャガイモや豆が積み降ろされるのを見た。ラバを繋いでいるのは、黄色の生きたヘビだった。男は、すぐに寝入った。目覚めたときは、もうだいぶん明るかった。泊まったはずの家はもはやそこにはなく、男は湖畔で眠っていた。湖〔ティティカカ湖……引用者補足〕の神様ママコーチャだったのだ。三人の兄弟が盗んできたものがそっくりそのままそこにあった。ジャガイモも豆もトウモロコシも。

雷に打たれて死んだ人があの世に行くと、ママコーチャの下僕になる、という。あの世では、荷物を積んだり降ろしたりして、ママコーチャの略奪の手伝いをして暮らす。彼らの周りは食べ物如山だが、人々からは憎まれる。村には何も残っていないからだ。

## Ⅲ アンデスの神々

ペルー・アンデスの人々は、16世紀のスペイン人による征服の結果、キリスト教に改宗させられるが、それと同時に、先インカ期以来の汎神論的な信仰心も保持してきた。資料5・6のアウサンガテ山<sup>8)</sup>は雪を頂き、とりわけ重要な高峰であり、山岳信仰の中心的な対象の一つである。

また、資料7以後のパンパマルカ、パンパクチュ、ワンカなどの神様は、拙稿「ペルー・アンデスの口頭伝承—十字架—<sup>9)</sup>」で紹介した事例に属し、アンデスの山岳信仰とキリスト教とが習合したフォーク・カトリシズムの例と考えられる。

拙稿で指摘したように、アンデスの神々には、アンデス世界を規定する互酬原理に基づいた二面性がある。つまり、「奇跡を起こす神」と「懲罰する神」という二面性である。

資料5の家畜業者は、アウサンガテ山の神様から花嫁や家畜や金銀をさずかりながら、サミンチャの礼<sup>10)</sup>を怠ったばかりに、一切合財を一瞬にして失ってしまう。また、悔悛したにもかかわらず、アウサンガテの神様に蠅のように殺されてしまう。資料9の二人の妻を持つ鉱山師は、ワンカの神様の聖水で難病が治るが、教会婚をした妻と暮らせ、という神様との約束を履行しなかったために、熱病により死んでしまう。

グレゴリオの語る伝承は、けっしてハッピーエンドには終わらない。当のグレゴリオの場合はどうか。やはり、「奇跡を起こしてくれる神」よりも「懲罰する神」のほうが近かったようだ。

二番目の妻のホセーファは、もともと病弱で、頭痛や腹痛、背中痛に苦しんでいた。クスコ県パンパマルカの出身で、家族もそこで暮らしていたので、パンパマルカの神様（資料7）の祭礼に帰郷することにした。グレゴリオは仕事を休めなかったので、ホセーファ一人で行って、自分たちの分も祈ってくれるように頼み、故郷でミサも上げてもらえるように100ソルを渡したという。しかし、ホセーファは市では食料や衣服を買い込み、ミサのことは忘れてしまった。ホセーファは、パンパマルカのオクタボ（8日目の祭り）の4日後にクスコに戻ってきたが、パンパマルカの傍にいながら神様のことを忘れてしまったので、数週間後に病気になった。このようにして神様は妻を懲らしめになった、とグレゴリオは考えた。

また、青年時代にシクアニにいた頃、グレゴリオは、ワンカの神様の定期市で甕を売って一儲けしようと考えた。主人らからロバを2頭借り受け、サンペドロで甕を買い込み、トウモロコシと物々交換しようというのだ。ワンカに無事に着き、甕は全部売り切れ、ロバに水を飲ませた。資料10にあるように、聖母マリアの泉の水を飲ませ、善きキリスト教徒に変え、積荷にも幸運が宿るように願ったのだ。ところが、ロバはやがて発熱し、必死に介護したにもかかわらず、死んでしまう。病氣平癒を祈願するワンカの神様の膝元でロバを死なせてしまったわが身の不運を嘆いた。きっと、間違えて悪魔の泉の水を飲ませた、とむりやり自分を納得させようとしたかもしれない。結局、死なせたロバを弁償するために、主人のもとで2年間働くこととなる。

### 【資料5】アウサンガテ山の神様

アウサンガテ山のあたりの村々を旅していた家畜業者が、山の正面の大きな岩に腰をおろした。そこに、その地方の身なりをした人間が現われ、男に、自分の娘と結婚したら、家畜を売ってやろう、娘は自分の命令に従う、と持ちかけた。男は結婚に同意した。ついて行くと、アウサンガテ山の中腹の岩が扉のように開いた。その晩娘と寝たのかどうか、定かではない。翌朝、男は、見知らぬ村にいた。リヤマやアルパカがいっぱい群れていた。数日後、男は娘と結婚した。ところが、娘の親はアウサンガテ山の神だったから、結婚式にはアレキーパのマイシスコ山の神やクヌラナ山の神が呼ばれた。

結婚してたくさんの月日がたった頃、男は、妻と一緒に、故郷に帰ることにした。一頭のリヤマの背に義父からもらった包みをしばりつけて、二人は出発した。中身は銀貨だっただろう。クスコに着いて、男はチチャというトウモロコシ酒を飲もうとしたが、妻は断り、サミンチャをしてくれるように言った。しかし、この野卑な男には通じなかった。サミンチャもせずに飲み干すと、妻も飲むように強要し、拒まれると、チチャをかけ、妻を殴った。すると、妻の姿は、リヤマや荷物と一緒に、掻き消えた。次の日、酔いが醒めると、男は後悔し、旅に出た。妻と出会う前と同じ岩に腰をおろした。このうすのろは何日も座り続けた。鳴動とともに、山の扉が開いたが、このたびは大きな腕が出てきて、男を蠅のように驚掴みにすると、山の奥深くへと引き入れたという。

### 【資料6】アウサンガテ山の神2

アウサンガテ山の神が、ペルー政府の長と話し合うためにリマまでやってきた。山の神は、黄金色に輝く最上の服で官邸に入った。政府の長は羨んだが、山の神は、彼の警官や取り巻きがピクーニャを殺し回っていることを、殺し続けるならば、ピクーニャをみんなアウサンガテ山に囲い込んで、ペルーの全土からいなくさせることを、伝えにきたのだった。

### 【資料7】パンパマルカの神様

パンパマルカの神様は奇跡を起こす。しかし、パンパマルカの出身ではなく、クラワシ村の出身である。歩き疲れてチャリヤカチャ川のほとりのヤウリ<sup>11)</sup>の木の下で、休んでいた。ユユという大根の葉っぱを摘みに来た貧しい女が通りかかり、女は、パンパマルカへ、嘘のように一歩、二歩で知らせに帰った。「あそこのチャリヤカチャに銀のわらじを履いたお人が、疲れきった姿で、血の汗を流しながら、ヤウリの木の下にいる。」人々は、「血の汗を流すなんて、ただのミスティ [非インディオ……引用者補足] ではない」とつぶやき、例の女を先頭に、みんなで連れに行った。スリマナにいたパンパマルカの司祭は知らせを受けると、十字架をかつがせ、鞭を鳴らしながら、やってきた。歌と祈りの中、香でもてなし、パンパマルカに連れてきたが、神様はそこには住もうとせず、姿を消した。チャリヤカチャで見つけて、再びパンパマルカに連れ帰った。1レグア<sup>12)</sup>以上の距離だ。が、再び姿を消した。パンパマルカの村役と村人はみんな、鞭とペルー国旗を持って、笛と太鼓を打ち鳴らしながら、向かった。司祭が先頭で、裸足のまま十字架をかついでいった。ヤウリの木の下で発見し、みんなが懇願してパンパマルカに戻ってもらった。

彼がパンパマルカにとどまるようになってからは、金持ちや権力者が村に現われるのを許さなかった。彼が唯一の領主である。今でも村役たちは、裁判官も代官も村長も、貧しい者である。金持ちは村にいたることができず、出て行かなければならないのだ。

### 【資料8】パンパクチュの神様

パンパマルカの神様には五人の兄弟<sup>13)</sup>がいて、その一人がパンパクチュの神様である。この神様も、コチリワイ村を目指し、アコマヨを越え、ピルピントのあたりを歩いていた。とある坂で、アランサッチャの木が木陰を作っていたので、腰をおろそうとしたが、木は遠くへ逃げた。怒っ

たパンバクチュは、木に呪いをかけて、行ってしまった。アランサッチャの木は今では、石ころだらけの砂漠の坂に、枝ばかりで、小さな葉っぱが幹についているだけだ。それまではアランサッチャは柳のようによく茂った木で、温暖な谷から冷涼な高原に行こうとする旅人に木陰を提供したものだ。

パンバクチュは、この坂では休まず、ようやく泉のある丘に着いた。プーナと呼ばれる冷涼な高原からの雪解け水を飲んだが、肺炎になった。彼にとっては水が冷たすぎたのだろう。肺炎になったので、血を吐いた。今日まで、その丘は血で染まっている。パンバクチュの本名はハシント・ロケ<sup>14)</sup>である。口から血を吐きながらようやく着いたところで、彼は奇跡を起こす。コチリワイの人々がきっと発見したのだろう。ミサを上げに、どこから司祭がやってきたのかも知らない。しかし、奇跡のことが知られると、いろんなところから踊り手たちがやってきた。

### 【資料9】ワンカの神様

パンバマルカの神様のもう一人の兄弟がワンカの神様である。彼の奇跡は、マチュ・パチャトウサンにほど近いワコトの小村で起こった。ワコトの近くにアタスという谷間があり、そこへワコトの子供たちが牛や羊やリヤマを放牧させに行っていたという。この草地に、ある日、パンを持ったミスティの少年が現われて、子供たちと仲良くなった。こうして遊び始めて、家畜の世話もしなくなった。数日がすぎたが、家畜がいなくなることも、キツネやプーマに食われることもなかった。反対に、家畜は太り、数も増えた。子供たちはお弁当を食べていなかった。「ミスティの少年がおいしいパンをくれるから。」ある日、一人の父親が確かめに行ったが、自分の子供たちが家畜の世話もせずに遊んでいる姿しか見えなかった。

以前は、この少年はアタスのアバチャータとして知られる石積みのところ暮らししていたが、ここはとても寒くて、風も吹きすさんでいたから、好きでなかった。青年になった彼は、この石積みから降りてきて、ワンカワンカと呼ばれるところで暮らすようになった。青年は旅に出て、梅毒にかかった人物と知り合った。数日後、治療しに彼の家まで出向いた。この病人の名はペドロ・アリアスといい、二人の妻を持つ、金持ちの鉱山師だった。妻たちは男を人間扱わず、食事も遠くから渡すだけだった。治療師で治せる者はいなかった。青年が一瓶の水を振りかけると、できものはすっかり消えた。感謝する病人に、「訪ねて来たいなら、一人でワンカワンカのブマックワンカナンパタ<sup>15)</sup>へ来なさい。」と答えた。ペドロ・アリアスは妻たちに別れを言い、一頭のラバに乗り、もう一頭のラバにたくさんの銀貨を積んで、村から村へ旅に出た。何千人にも訊いたが、分からず、もう食料も銀貨もなくなって、クスコ市のサンプラスの安宿に投宿したところ、ワンカワンカあたりの出身の村人に会った。喜んで、その村人に何杯もチチャ酒をおごった。翌日、村人に連れて行ってもらって、サンサルバドールの村でラバを降り、徒歩でブマックワンカナンパタまで行った。神様は草むらの中で暮らしていた。神様は、血の汗を流していた。ペドロ・アリアスはサンサルバドールに立ち戻り、司祭に知らせた。司祭らは十字架を掲げてその場所に行った。ペドロ・アリアスが一番に着いた。司祭やたくさんの人を見ると、神様は逃げようとした。追いつかれそうになった神様は、巨岩の上に仰向けになり、そこに張り付いた。岩には、神様の身体の輪郭だけが残った。この奇跡が起こったので、祈りとミサが上げられた。ペ



ドロ・アリアスは小さな家を作った。今では大きな修道院になっている。

ある日、神様がペドロ・アリアスの前に現われて、「二人の妻のうち、結婚した妻とだけ暮らしなさい。そうしなければ、お前の首をはねるぞ。」と言った。ペドロも誓った。こうして喜んで故郷に帰ったが、正妻は、彼が誰なのかもわからない振りをした。もう一人の妻は嬉し涙を流し、たくさんのチチャ酒とご馳走で祝ってくれた。そこで二人の妻と暮らし続けたが、しばらくして、約束を忘れたかどで、神様は男を熱病でほうむった。

#### 【資料10】 ワンカの泉

ワンカの神様の聖堂の近くには、四つの泉がパチャママから、つまり地中から湧き出ている。最初の泉は聖母マリアの水であり、この水を飲むと、善きキリスト教徒になる。また、年寄りには疲れを癒す。二番目の泉は、耕作者の守護聖人イシドロの泉であり、祝福されている。これを瓶に入れて持ち帰り、畑の取水口に注いでおくと、日照りのときも、水が枯れることはない。三番目の泉は、大天使の水であり、これを子供に飲ませると、腹の虫が駆除され、疥癬も治る。最後の四番目の泉は水量が一番多く、サクラという悪魔のものである。この水は呪われているから、飲むべきではない。ライカという邪術師が、呪いをかけるために飲むのだという。

### Ⅳ 牛泥棒

"Ama llulla, ama suwa, ama qella." (嘘をつくなかれ、盗むなかれ、怠けるなかれ。)

これは、アイユと呼ばれる村落共同体で日常の挨拶代わりに交わされていた、といわれている格言である。過酷な自然環境を生き抜くために、自然のわずかな恵みを平等に分け合うように、複雑な互酬関係の網の中で生活が営まれていたペルー・アンデスの村落共同体は、一種の相互監視の社会だった。蓄財することは、けっして善であるとは見なされなかった。他人よりも蓄積してしまった財は、宗教儀礼のカルゴ役などを通して散財すべきものだった。でなければ、ニヤカックとかピシュタコとか呼ばれる脂肪抜き取り魔や首切り魔<sup>16)</sup>にされてしまいかねなかったからだ。

資料7のパンパマルカの神様は、金持ちが村の中で暮らすことを禁じた。また、資料19にあるように、自動車に乗るのを人々が嫌ったのは、自動車に乗るのは金持ちだけで、不正に蓄財したからだと誤解されてしまう、と考えたからだ。出身農村における金銭観を、人々は、クスコ市で暮らすようになったあとも、持ち続けた。

グレゴリオも、このような意味での「盗むなかれ」のいましめを身体内化していた人物であると考えられるが、資料13にあるように、牛泥棒の共犯であるという嫌疑をかけられ、禁錮6カ月の刑に処せられた。この刑務所で知り合いとなるカマラ村出身の囚人からさまざまな口頭伝承や経験談（たとえば、資料14）を聞かされ、快哉を叫んだりするが、彼らは自分とは異なる星の下に生まれた人々であるとし、盗みについての意見を完全に共有したわけではなかった。

ただし、自分の嫌疑についてはよほど腹に据えかねたのか、つぎのような義憤をもらしている。裁判官たちやミスティたちはみんな、朝も昼も晩も牛肉を食べている。その肉は盗まれた牛のも

のだ。このことを彼らはみんな知っている。ウルコスの裁判官のルイス某も、彼のために盗んだ牛泥棒たちを裁いている。彼自身は刑務所には行かないし、官憲に知らせもしない。裁かれるのは自分たちだけであり、ミスティに対して法律は別の顔を向けるのだ、と。

なお、キリスト教の神様がこの世界では邪術師や盗人として有名だったという、資料11や資料12の話については、筆者は他の出典に掲載されている例を知らず、興味深い。

#### 【資料11】神様の逃亡と聖イシドロ

昔、神様は、この世界では邪術師や盗賊として知られていた。神様にはたくさんの仇敵がいて、追いかけていた。「あの邪術師はどこにいった?」「このあたりは、邪術師も盗賊も通りませんでした。」村から村へと訪ね歩いてきた彼らは、ある日、耕作者の守護聖人である聖イシドロが小麦を蒔いているのに出会った。そのほんの少し前に、神様が聖イシドロの畑に通りにかかり、「私のことを訊かれたら、通ったけれど、それはこの小麦を蒔いたときのこと、一年前のことでした」と答えるように頼んでいったところだった。追跡者がやってきたとき、言われたとおりに答えて振り返ると、小麦はもう脱穀するのを迎えていた。

#### 【資料12】神様の逃亡と雌牛

昔、雌牛の色がまだまっ黒だった頃、追跡されるのに飽き飽きした神様は、仇敵たちの雌牛を隠して、乳を搾った。その乳を、聖水のように、牛の群れに振りかけた。牛の色を変えて、持主に分からないようにしたのだ。持主たちはほうぼう捜し始めた。こうして仇敵たちは神様を追跡するのをあきらめた。牛泥棒は、神様のいたずらから始まったのだ。

#### 【資料13】牛泥棒（グレゴリオの経験談）

グレゴリオは、退役1年後、ポマカンチ出身の友人と一緒に、砂金採りのために熱帯地方のキンセミルに向けて旅立った。カトゥカの町では友達の知り合いの家に泊まった。しかし、この知り合いは、夜には牛泥棒に早変わりした。盗んできた牛を殺して料理すると、家族で一晩中食べ続けた。夜明け前になってようやく、二人はシチューを少しだけ相伴した。そのまま、昼まで眠ってしまった。牛の持主と官憲が追いかけてきて、二人を含む全員を逮捕した。牛を三頭も盗んだのだ。

法廷で、グレゴリオは裁判官の誘導尋問にひっかかって、「はい、彼らはほんの少しだけシチューをくれました。でも、肉はくれませんでした。ほんの少しのスープだけです。」と、答えてしまった。これに対する裁判官の判決はつぎのとおりだった。「いや、息子よ、だからこそ、お前は刑務所に行かなければならない。肉は、スープがなければ価値がない。スープにこそエッセンスがある。だから、刑務所に行かなければならない。盗まれた肉を食べる前に、官憲に知らせなければならなかったからだ。知らせなかったことがお前の罪なのだ。」グレゴリオは、牛泥棒の共犯とされ、禁錮6ヵ月を言い渡され、実際には9ヵ月をクスコ県ウルコスの町の刑務所で暮らすことになった。

**【資料14】牛泥棒 2**

法廷で裁判官から「君、自由になりたいのなら、本当のことを言いなさい。」と追求されたとき、カマラ村出身の一人は、次のように答えた。「私たち貧乏人は、いつも旅をしなければなりません。牛を盗んだことなどありません。馬に乗ってその町を離れようとしていたとき、あの牛が小さな坂の上で草を食べていました。いたずらのつもりで縄の一方の端を投げて引きずっていきましたところ、家に戻ってみると、あの忌まわしい牛が私の馬のあとから縄についてきたのです。私は快哉を叫びました。神様、ありがとうございます。この小さな牛を私たちにおつかわりになろうとされている、と。だから、牛を殺して家族みんなでいただいたのです。私は盗人ではありません。牛のほうが、私の家まで縄を慕ってきたのですから。」

カマラ村出身者はそのような星に生まれつuitaに違いない。地に呪われた者すら彼らにはうんざりし、逃げ出すほどのだから。

**V スペイン人・キリスト教・文明**

インカ帝国の中心クスコ〔クスコ市外ではあったが〕で生まれ育ったグレゴリオは、人並みの親インカ感情や反スペイン感情を抱いていたことに疑いはない。しかし、スペイン人やキリスト教や文明に対する感情には複雑なものがあつたようだ。資料15・16からは、インカや自分たちインカの末裔の無欲さに対する誇りとともに、インカを殺害したスペイン人の欲深さが文明をもたらししたことへの腹立たしさが感じ取れる。

また、ペルー・アンデスの土着の汎神論的な信仰心にどっぷり浸かって育ったグレゴリオにとって「キリスト教徒らしく」ふるまうとは、夭逝した実子が資料17のようなリンボ界<sup>17)</sup>で苦しまずにすむように、あるいは病院で病死した二番目の妻ホセファが共同墓穴に投げ捨てられないように、木棺を用意し、しかるべく埋葬することだった。あるいは、「怒り中毒」にかかったアスタの苦しみを軽減するために、教会で結婚式をあげることだった。そのグレゴリオがもっともキリスト教徒らしくないと思ったのは、ペルーの軍隊だった。彼にとって軍隊とは、人間を家畜扱いする場所、物がすぐになくなる場所、先住民だけが徴兵される場所、そしてケチュア語を喋ってはいけない場所、スペイン語で号令される、つらい場所だったようである。

確かに、軍隊も病院も、そして官憲も、先住民系の（まさに「インディオ」の）、荷担ぎ人夫や食べ物売りのグレゴリオたち、都市の貧民には、やさしくはなかった。グレゴリオらがクスコ市に移住するようになる時代、ペルーは、資料18・19のように自動車や飛行機に代表されるような文明や近代化の時代を迎えるが、その一方、資料6にあるように、ピクーニャの乱獲を諫めるためにわざわざアウサンガテの神様がペルー「政府」まで出向かなければならないような時代になっていた。

グレゴリオがアスタと一緒に数年前に久しぶりに訪れたワンカも、昔日のような物々交換の場ではなく、なんでも「金、金、金」の現金取引になっており、自動車やトラックが「蟻のように」行き交っていた。かつての巡礼地は観光地化していたのだ。クスコ市にやってきて以来、グレゴリオが不思議に思うのは、家族や友人の間以外には、ほとんどアイニが見られないことだっ

た。まるで、都市に出てきてしまうとみんな、このような、互いに助け合うという労働交換の方法を忘れてしまうように思えた。だから、クスコのスラム街でも、人々はアイニではなくお金のためにだけ働き、いつまでもみすばらしい掘り立て小屋のままなのだ、と嘆くのがだった。

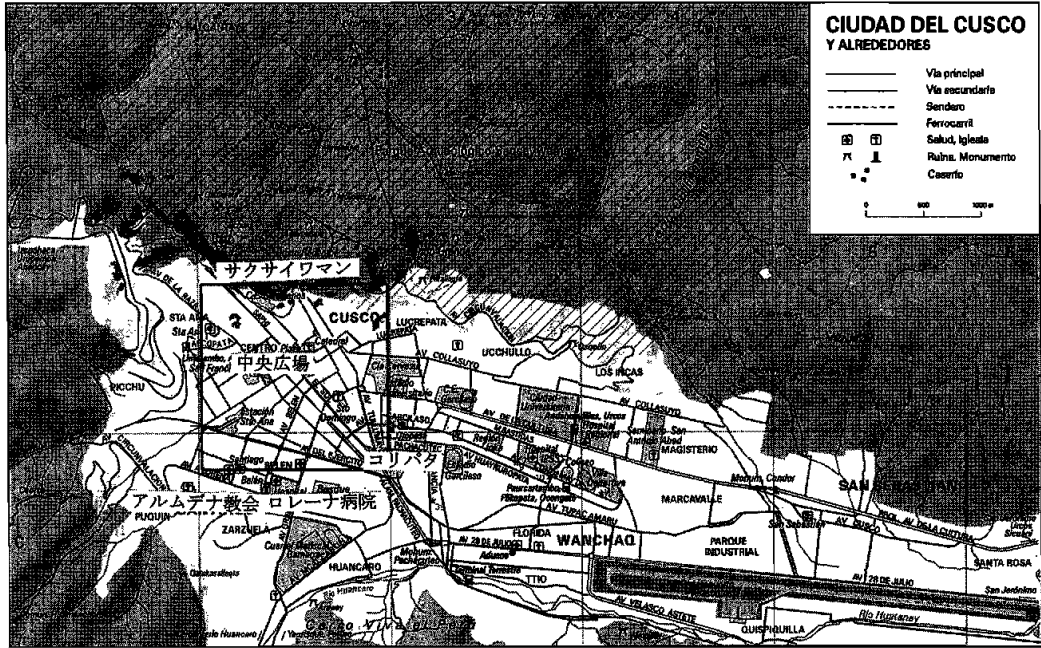


図3 クスコ市

(出典) *Guía turística del Cusco y región*, p.19.

### 【資料15】神様とインカ

神様が町々を旅して「どんな仕事をしてほしいか」と尋ねたら、インカリつまりインカ王は「何もいません。石を歩かせることも、一回の投石で山や谷を作ることでもあります。知るべきことはみんな知っています。」と答えた。二つの顔を持つ神様は私たちの祖先の敵であるスペイン人にも尋ねた。スペイン人は欲深で野心家だったので、あれもこれもと注文した。だから、私たちは、エンジンや自動車も、ヘリコプターや飛行機も、知らないのだ。

### 【資料16】インカとスペイン人

トゥパック・アマル<sup>18)</sup>はトゥングスカの出身で、同郷人だ。インカの息子でもある。ある日、仇敵のスペイン人によって殺された。トゥパック・アマルの仇敵は、私たちの祖先であるインカの仇敵でもある……。

スペイン人たちはインカを殺した。インカたちは紙も文字も知らなかった。神様が紙を与えようとしたが、断ったのだ。情報は、紙ではなくビクーニャの毛<sup>19)</sup>を使って伝達した。スペイン人は「この紙が話す。」と言って渡したが、インカは紙を地面に捨てた。文字が分からなければ、紙は話しようがなかった。インカは殺された。「インカが戻ってきたら、スペイン人たちはどう言うだろうか?」と、グレゴリオは思う。

**【資料17】 リンボ界**

リンボ界はウクパチャという地下世界にあり、夜のように暗くて真っ暗だ。洗礼を受けずに死んだ幼児の魂が行くところだ。これらの魂は、暗闇の中をもがきながら、何レグアも、鐘を鳴らす紐を探し回る。誰かが探し当てると、鐘が鳴り、幼児の方向に一条の光が射してくる。すると、翼が生えてきて、鳩になる。こうして、これらの魂は救われ、ハナックパチャという天上世界の庭師になる。

**【資料18】 飛行機（グレゴリオの経験談）**

「人間が風の上を早足で歩くんだって。」と人々が口伝てに噂し合っていたときに、飛行機がやってきた。「おお、神様、なんという獣をおつかわしになったのでしょうか。」と言うと、洗髪するためにとってあったおしっこを振りかけ、ニンニクを噛み砕いて吐きかけた。「プツ、プツ。不吉な前兆だ。なんというキリスト教徒なのだ、これは！」と。

シルキンチャ山のほうから、コンドルのような巨大な鳥が現われた。グレゴリオは、グメルシンドおじさんから聞いた話を思い出した。この世の終わりの数日前に、コンドルの頭とリヤマの足をもつアルカマリというのがやってきて、私たち、インカの末裔に、この世の終わりに備えるように告げに来るのだそうだ。「司祭のピサロに殺されて以来、ウクパチャという地下世界で暮らしておられるインカリが、この世の終わりの日に、私たちのもとへやってこられるのだ。」だから、飛行機が私たちの方角に向かってきたとき、「これは、神様の奇跡だ。」と叫び、跪いて祈った。私も、「自分は罪を犯していません。いつも畑を耕して、両親を手伝ってきました。」と、心の中で唱えた。飛行機は通り過ぎ、シクアニのほうへ飛んでいった。

**【資料19】 自動車（グレゴリオの経験談）**

最初に自動車を見たのはサンペドロでだった。それは、物を運ぶ小さなトラックのように見えた。当時は、人々は徒歩か、ラバか、馬か、ロバで旅行した。だから、自動車で旅行する者は揶揄された。「銀貨を持っているから、お金持ちだから、自動車に乗るのだ。」そのように見られたから、人々は自動車では旅行しなかった。

**Ⅵ おわりに**

グレゴリオが自らの人生を語る決心をしたのは、自分たちが味わったような辛酸をつぎの世代の人々には味わわせないように願ったからだった。

ペルー・アンデスの農村は、スペイン人による征服と植民地化の結果、半封建的な制度が接木され、根底的に歪曲されてしまったものの、アイニという互酬労働の〔つまり相互扶助の〕世界という側面も、なんとか残存していた。残念ながら、孤児だったグレゴリオや、父や兄を失ったアスタは、このアイニの網の目を十分に活用することができず、やがてクスコ市に移住し、そこで二人が出会うことになる。クスコ市は、第Ⅴ章にあるように、グレゴリオの目には、「金、金、金」の世界に映った。このクスコ市でも金には無縁で、辛酸の限りを味わうが、それにもかかわ

らず、あるいはそれだからこそ、クスコ市で、自分たち荷担ぎ人夫〔グレゴリオの目には他者から顧みられることのない「都会の孤児」に見えた〕の間に、アイニのような相互扶助の組織が復活されることを夢見たのである。英語版の「あとがき」によれば、1987年にはグレゴリオ・コンドリ・ママーニの名を冠したNGO組織がドイツ人と地元の有志の手で結成され、避難所「荷担ぎ人夫のための家」も生まれている。

三番目の妻であり、教会婚をしたアスタは、グレゴリオのような語り部ではなかったのか、口頭伝承らしい話はほとんど残していない。だから、最後に、つぎのようなアスタの言葉を、結語として、記しておきたい。

#### 【資料20】人生最後の仕事（アスタの話）

死ぬ8年前になると、私たちの魂は歩き始め、人生で歩いてきたあらゆる場所から自分の足跡を集めるといふ。こうして私たちの哀れな魂は何度も何度も立ち止まり、不注意のせいで縫い針を地面に落としたかもしれない場所で最後の苦しみを受けているのだ。だから、縫い針とかかがり針とかは、注意して扱わなければならない。ああ、きっと、私の魂も、もう巡礼を始めたのだ。だから、疲れ切った足で、私は目を覚ますのだ。

#### 注

- 1) Ricardo Valderrama Fernández & Carmen Escalante Gutiérrez, *Gregorio Condori Mamani: Autobiografía*, Cusco, 1977. 筆者の手元にあるのは、1981年の第2版、スペイン語とケチュア語の二言語併用版であり、人類学者ソイデマのスペイン語の序文がついている。本稿執筆のためには、この第2版と、注4)の英語版を活用した。なお、アスタの証言については、すでに『資料ラテンアメリカ』第36号(2003年8月刊)に訳出した。
- 2) 1940年の国勢調査では、ペルー全土で15歳以上の住民のうちでスペイン語の非識字率は57.4%にのぼった。性別・地域別の比率が分かる1961年の国勢調査では全体では38.9%まで減少したが、都市(17.7%)よりも農村(59.4%)のほうが、また農村でも男性(41.6%)よりも女性(76.2%)のほうが、非識字率はかなり高かった。
- 3) 1968年に権力を奪取したベラスコ軍事政権(一連の、上からの近代化改革の一環として、先住民言語の一つであるケチュア語を、スペイン語と同等の公用語に指定した。その結果、1975年には、ケチュア語の正書法が制定され、それに基づいて地方ごとに6種類の辞書と文法書も出版されることとなる。この改革が挫折したあとも、今日まで、ケチュア語による出版を積極的に進めてきた「バルトロメー・デ・ラス・カサス」アンデス農村研究所は、この『自伝』を「アンデスの口頭伝承」シリーズの一冊として出版している。
- 4) Paul H. Gelles & Gabriela Martinez Escobar trs., *Andean Lives: Gregorio Condori Mamani & Asunta Quispe Huaman*, Austin, 1996.
- 5) 熱帯高地については、山本紀夫「熱帯高地とは一人間の生活領域としての視点から」『熱帯研究』5巻3/4号(1996年)を参照。
- 6) ラ・ラヤとは、想像上のものを含めた境界線を意味する。文中の場合は、具体的には、ペルーとボリビアの境界を形成するプーノ地方を指す。

- 7) チャナクとは、ケチュア語で末っ子を意味する。
- 8) アウサンガテ山は、クスコ県キスピカンチ郡に位置する、海拔6384メートルの高峰で、クスコ地方の地元住民の信仰を集める。
- 9) 拙稿「ペルー・アンデスの口頭伝承—十字架—」『奈良史学』20号（2002年）
- 10) サミンチャとは、ケチュア語で、その日最初に飲んだり食べたりするとき、吹いたり爪ではじいたりして、地母神や山の神にその香りを捧げることを意味する。
- 11) ヤウリはアンデス中腹地帯に特有の灌木で、丈は1メートルくらいになる。刺があり、赤っぽい花が咲く。学名は、*Barnadesia Dombeyana*である。
- 12) レグアは長さの単位であり、スペインでは、1レグアは約5.5キロに等しい。
- 13) その他の兄弟は、クスコ地方の巡礼先として有名なコイリュリティと、アクリヤマユである、とグレゴリオは名前だけあげている。
- 14) ハシント・ロケは、カトリックの聖人の名前である。シンクレティズム現象の一つであることが明らかであろう。
- 15) プマックワンカナンパタとは、ケチュア語で、「ピューマが雄叫びを上げる場所」を意味する。
- 16) ピシュタコについては、加藤隆浩「ピシュタコ—アンデス世界における村落と都市の媒介者—」杉本良男編『伝統宗教と知識』（南山大学人類学研究所、1991年）などを参照。
- 17) リンボ界とは宗教用語で、地獄の辺土を意味する。未洗礼のまま死んだ幼児の魂が行くところとされる。
- 18) 文中のトゥバック・アマルはトゥバック・アマル二世、つまりホセ・ガブリエル・コンドルカンキを指す。18世紀後期に先住民らを率いて蜂起した、ペルー独立運動の先駆者であるが、スペイン副王軍に破れ、八つ裂きの刑に処せられる。
- 19) 文中では、ビクーニャの毛を使って作ったキープのことを指す。縄の色や結び目で数を記録した。

## Resumen

El autor está traduciendo al japonés un libro bilingüe: *Gregorio Condori Mamani: Autobiografía*.

Gregorio nació y creció como un huérfano en una comunidad andina del Perú en la primera mitad del siglo veinte cuando se quedaban las costumbres semi-feudales y después se mudó a la ciudad de Cusco. Ahí pasó su vida como un cargador en las décadas de 1960 y 1970. Para que sus paisanos no tengan los mismos sufrimientos, se decidió hablar de su vida a un antropólogo joven Valderrama. Esta autobiografía no solamente es una historia oral, sino también un tesoro de tradiciones orales. Gregorio, un orador genial, habla las experiencias de él mismo como una historia.

En este artículo, el autor quiere presentar las tradiciones andinas, clasificándolas en 'la naturaleza andina', 'los dioses andinos', 'los ladrones de vacas' y 'los españoles, el cristianismo y la civilización'.

